

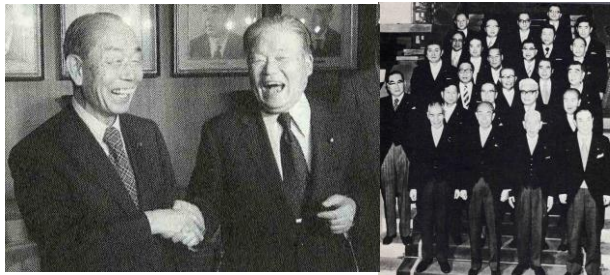
甲状腺外科草子 143 哲人宰相：大平正芳余話⑬

杉野 圭三

総理への道

大福密約により福田赳夫は第 67 代総理大臣に就任した。NHK の島桂次アメリカ総支局長は大平に「あなたは福田さんと約束したそうだが、そんなものが当てになりますか。岸総理と大野伴睦さんとの約束を思い出して下さい。大野さんは岸さんに約束を反故にされたじゃないですか。総理総裁を目指すなら、今こそ断固たたかうべきです」

大平は「島君、だまされてもそれが国のためになるならいいじゃないか」と聞く耳をもたなかった。



福田と大平 (1976 年 8 月 23 日)

福田内閣 (同年 12 月 24 日)

幹事長になった大平の素顔を幹事長室室長の奥島貞夫氏は語る。

大平のあだ名は「鈍牛」、「アー、ウー」という独特の語り口を揶揄されたりもした。だが、私に言わせれば、仕えた幹事長のなかで大平ほど「哲学」を感じさせた政治家はいない。敬虔なクリスチャンでもあり、熟慮の末に言葉を選び、およそ失言の類とは無縁。発言の内側にはじっくり煮込んだ肉料理のような深い味わいが醸し出されていた。発言録から「アー、ウー」を削除すると、見事な名論文になっていた。学究肌の人柄にも驚かされたものだった。即断即決の“コンピューター付きブルドーザー”が田中なら、大平は“行動する哲学者”とでも形容すべきだろうか。「鈍牛」などと聞くといかにもアバウトな印象を受けるが、大平の実像はまったく違った。手帳にびっしりとスケジュールを書き込むような几帳面な人物だったのである。事務局が幹事長用に作るポケットサイズの日程表の内容まで自分の手帳に書き写す念の入れようだった。

家庭での大平は言語明瞭だったという。「外でアー、ウーなのは外国人も、若い人も、おじいちゃん、おばあちゃんも、みんなに分かる言葉を選ぶから」と語っていた。

福田は 1977 年の参院選で保革逆転を阻止、1978 年のボン・サミットなどで自信を深め、大平との約束を破った。1978 年 10 月中旬、福田は大平に電話し「もう自分の陣営をまとめきれなくなった」と伝えた。

自民党内では大平幹事長が総裁選に挑む事への懸念があり、田村元議員らが「一種の主殺しだ」と述べると、大平は真っ赤になり「君たちは僕に死ねというんですか」と怒った。

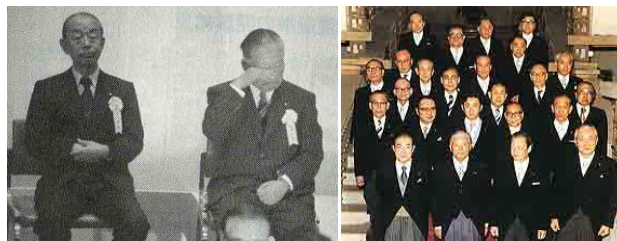
1978 年 11 月の自民党総裁選挙で大平が和歌山県に遊説に来た時のことを二階俊博氏は回想する。

「政治に過度の期待をかけてくださるな、私が自民党総裁、総理になっても、それほど大きなことができるわけではありません」

二階俊博は驚いた。できますと言えば票は入る。しかし実現できなければ投票してくれた人を裏切ることになる。大平さんは本当のことを言っている。この人物は信頼できる政治家だと思いました。(時代の証言者、二階俊博 2025 年 4 月 1 日、讀賣新聞)

総裁予備選挙では、事前の世論調査で福田が有利だったが、田中派の全面支援の下、大平は福田を上回る票を獲得し勝利した。

福田は「天の声も、たまには変な声がある、敗軍の将、兵を語らず」と述べ、大平は「一瞬に意味がある時もあるし、十年、二十年に実のない時間もある。歴史というのは奇妙なものだ」と語った。この結果で福田は本選を辞退、大平総裁が誕生した。



大平総裁選出 (1978 年 12 月 1 日)

第一次大平内閣 (同 7 日)

官房長官人事では大平は親友の伊東正義を考えていたが、田中六助が「自分が一期先輩なので自分をしてくれ」と言って大平邸の寝室にまで入って 3 日間帰らない状況となり、大平夫妻を困らせた。



田中六助

伊藤正義

齋藤邦吉

田中六助を官房長官にすると、今度は伊東正義が家にこもり出てこなくなった。娘婿の森田一は大平から「お前が行ってちょっと慰めてこい」と言われ、伊東邸を訪問し話し合いを行った。(まるで子供か!!)

幹事長には鈴木善幸に考えていたが、福田派の反対で齋藤邦吉となり、福田派に所属していたが大平寄りとなった園田直を外務大臣として入閣させた。

組閣人事は昔も今も総理の思い通りにならない複雑怪奇な政治力学のようだ。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2025 年 7 月 3 日